

親鸞の「横超」思想とその現代的意義

伊 東 恵 深

一 はじめに

本稿の目的は、親鸞が明らかにした「横超」思想の内実を考究し、さらに、その現代的意義について推究することにある。

筆者の近年の関心は、宗教的覚醒とは現代を生きる我々にとっていかなる目覚めをもたらすのか、またその過程において我々はどのような歩みを有するのか、ということにある。上記の問題関心のもと、筆者はこれまで、「有限」「無限」「内在」「超越」という言葉を手がかりに、浄土真宗、ことに親鸞思想における「覚醒」の内実や様相を主題として考察を重ねてきたのであるが、本論はこの問題関心を引き継ぐものである。

親鸞の「横超」思想は、浄土真宗における覚醒の様相を示す大切な言葉、あるいは重要な概念であると思われる。そこでまず最初に、「横超」という言葉について、『教行信証』

をはじめとする諸聖教の文言によりながら考究を行い、親鸞が「横超」という言葉に託した意義について尋ねることにする。さらにその上で、親鸞が開顕した浄土真宗の仏道、すなわち「横超」の仏道は、苦悩の現実を生きる現代人、つまり我々一人ひとりにとってどのような目覚め（変革）をもたらすものであるか、についても考究してみたい。

二 「横超」の語義

親鸞の著述において「横超」の語は、例えば『教行信証』「行巻」（「正信偈」）や「信巻」、「化身土巻」、「愚禿鈔」や仮名聖教などに確かめることができる。以下、すでに別稿で論じた事柄ではあるが、そこでの考究を援用しながら、あらためて「横超」の意味を再確認しておきたい。「信巻」の横超断四流釈によれば、次のように記されている。

「横超断四流」と言うは、「横超」は、「横」は豎超・豎出に対す、「超」は迂に對し回に對するの言なり。「豎超」は、大乘真実の教

なり。「豎出」は大乗権方便の教、二乗・三乗迂回の教なり。「横超」は、すなわち願成就一実円満の真教、真宗これなり。また「横出」あり、すなわち三輩・九品・定散の教、化土・懈怠、迂回の善なり。大願清浄の報土には、品位階次を云わず、一念須臾の傾に速やかに疾く無上正真道を超証す、かるがゆえに「横超」と曰うなり。

〔定親全〕一、一四一頁

親鸞は、釈尊の一代仏教を「横超」「横出」「堅超」「堅出」の二双四重の教相判釈によつてまとめ、浄土真宗の教えを「横超」とした。この註釈によれば、「横超」の「横」は「堅」に対し、「超」は「迂」「回」に対する言葉であることが分かる。「迂」と「回」はそれぞれ、「まがる、まわりどおい、とおまわり」「まわる、めぐる、行つたりもどつたりする⁽³⁾」という意味である。そして「横超」の内実を、段階的な修道をへめぐることなく、速やかに疾く無上仏道を超証することであると押さえている。ここに、われら衆生の生死の苦悩を速やかに分離せしめる道が、「横超」の仏道として示されている。

この二双四重の対応関係をより詳細に論じているのが、『愚禿鈔』の文である。いまは「横超」と「堅超」に関する了解を中心に尋ねることにしたい。

大乘教について、二教あり。

一には頓教、二には漸教なり。

頓教について、また二教二超あり。

二教とは、

親鸞の「横超」思想とその現代的意義（伊 東）

一には難行 聖道の実教なり。
いわゆる仏心・真言・法華・華嚴等の教なり。
二には易行 浄土本願真実の教、
『大無量寿経』等なり。

二超とは、

一には堅超 即身是仏、即身成仏等の証果なり。
二には横超 選択本願、真実報土、即得往生なり。

〔定親全〕二、四二三―四二四頁

真実に二種あり。

一には自利真実なり。

難行道 聖道門

堅超 即身是仏 即身成仏 自力なり。

堅出 自力中の漸教 歴劫修行なり。

二には利他真実なり。

易行道 浄土門

横超 如来の誓願 他力なり。

横出 他力中の自力なり。定散諸行なり。

（同前、四三七―四三八頁）

これらの記述から、「横超」という言葉の「横」と「超」の意味を、より正確に窺うことができる。まず、「横」の語は「他力」を表し、具体的には「易行道・浄土門」を指している。それに対して、「堅」の語は「自力」を表し、具体的には「難行道・聖道門」を示している。次に、「超」の語は、先に確かめた「迂」や「回」を意味する「出」の語に対応しており、「頓速の教え」（頓教）であることを表している。す

親鸞の「横超」思想とその現代的意義（伊 東）

なわち、漸次に修行を修して、段階的に高い境地に進んでいく教え（漸教）ではなく、何の段階も必要とせず、速やかに迷妄を離れて直ちに証果を獲得するあり方を示しているのである。

このような了解は、仮名聖教にも窺うことができる。親鸞は『尊号真像銘文』において、「横超」を次のように註釈している。

横は、よこさまという。よこさまというは、如来の願力を信ずるゆえに行者のはからいにあらず。五惡趣を自然にたちすて、四生をはなれるを横という。他力ともうすなり。これを横超というなり。横は豎に対することばなり。超は迂に対することばなり。豎はたたさま、迂はめぐるとなり。豎と迂は自力聖道のところなり。横超はすなわち他力真宗の本意なり。

（『定親全』三、四五頁）

ここでは、「横」は、自力を表す「たたさま（豎）」に対して「よこさま」という意味であり、如来の本願力によつて自己の迷妄を自然に超断することであると明らかにされている。このはたらきを「他力」というのであり、その内実は「行者のはからいにあらず」、すなわち人間の努力や修行をまったく必要としないのである。本来、衆生に根拠を持たない清浄なはたらき（他力）が我々に施与されること、そのことが「横」という言葉で示されている。そして、この「横超」こそが「他力真宗の本意」であると述べられているのである。

三 転成の道理

「横超」とは、本願を憶念して自力の心を離るる、これを「横超他力」と名づくるなり。これすなわち専の中の専、頓の中の頓、真の中の真、乗の中の一乗なり、これすなわち真宗なり。

（『定親全』一、二九〇頁）

この「化身土巻」の自釈がよく示すように、親鸞が明らかにした「横超」の仏道、他力真宗の教えとは、本願力に乗託することによつて、この煩悩の我が身の事実を一步も離れることなく、しかも自力の執心を超えて、無上正真道に立脚せしめられるあり方であった。

親鸞が「横」の語に「他力」という意義を読み取ったということは、それは、人間が考える論理、すなわち、自力を根拠として仏道を修していこうとする聖道門仏教の道理とは、質的にまったく異なっていることを表しているのである。これこそが、「具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり」と説示される不断煩惱得涅槃の仏道であり、親鸞が明らかにした他力の信心の自覚内容である。

以上、別稿での考察をもとに、「横超」の語に託された意義をあらためて尋ね直したのであるが、次に、この力用の転

換を「転成」という言葉に確かめてみたい。

「海」と言うは、久遠よりこのかた、凡聖所修の雑修雑善の川水を転じ、逆誘闡提恒沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧真実恒沙万徳の大宝海水と成る、これを海のごときに喩うるなり。良に知りぬ、経に説きて「煩惱の水解けて功德の水と成る」と言えるがごとし。

『定親全』一、七八頁

親鸞は「行巻」の他力一乗海釈において、凡夫善惡の心水が、本願他力との値遇を機縁として功德の大宝海水に転成すると、譬喩的に語っている。また『高僧和讃』の曇鸞讃では、先の經典を受けて、

無碍光の利益より 威徳広大の信をえて

かならず煩惱のこおりとけ すなわち菩提のみずとなる

罪障功德の体となる こおりとみずのごとくにて

こおりおおきにみずおおし さわりおおきに徳おおし

『定親全』二、九五—九六頁

と、「煩惱・罪障の水」が転じて「菩提・功德の水」と成ると端的に詠っている。如来による救済とは、何も煩惱の我が身自体が消滅してしまうということではない。人間の妄念が照破されるところに、流転の迷妄が翻されるのである。いま現に自分が生きている世界の意味が転ぜられ、新たな世界として眼前に広がってくる、この転換こそが「転成」の道理として教示されているのである。このような独特な生の歩みを、

親鸞の「横超」思想とその現代的意義（伊 東）

例えば今村仁司は「なお有限界に有限な身体に拘束されつつ居住しながら、同時に無限界に移動しつつある独自の覚醒実践」であり、「これは世俗と出世俗との中間領域である⁽⁵⁾」と独自の解釈をしているが、横超とは「自己の迷いを超える」という意味において、確かに「超越」という意義を有しているけれども、それは単に他世界への転生とか、いまの場所を離れてどこか別の場所へ行く（往く）という意味などではない。自己の人生の立脚地が転じられる、すなわち依止の転換こそが「横超」の現実相であり、その内実が「転成」として説示されているのである。

この様相を象徴的に捉えるならば、「よこさまにこえる」（横超）とは「横方向の移動」ということであり、空間で喩えるならば「水平移動」を意味している。それは、自力によって苦悩の心身を解脱して証果を得るという「縦方向の移動」、つまり「垂直移動」とは根本的に異なり、どこまでも凡夫の地平、群萌の大地に立脚し続けることを表している。そして、阿弥陀の本願によって、罪惡深重の衆生が愚かな身のままで証大涅槃の仏道に立脚せしめられることを意味しているのである。

四 おわりに

哲学者の古東哲明は、現代を生きる我々はいつも「いつか

親鸞の「横超」思想とその現代的意義（伊 東）

どこか」のために日々を慌しく過ごし、〈瞬間^{いまじき}〉の充溢を忘れて生きていると提起した上で、示唆的に次のように語っている。

時には、なにもしないことが、よほどたくさんのことをする。瞬間を生きるからだ。行為を越えた行為（無為）というのだろうか。それは、なにもしないという仕方、ただ在るだけ。ある意味、これほどむつかしいことはない。（中略）この点について、心理学者、河合隼雄氏がおもしろいことを言っている。ぼくたち人間は、せっかく「ある人」（human being）なのに、たいてい「する人」（human doing）になっている。「なにかすること」（doing）が人生の当然となっていて、なにかしなければ落ちつかない。無為（なにもせずただ在るだけ）は、本来のありかたではないという意識が強いのである。

（『瞬間を生きる哲学（今ここ）に佇む技法』一七四—一七五頁）
ここに述べられている、「何かする」という行為を追い求めていく方向とは、どこまでも自分の力を頼りにしていくわけであるから、いわば「自力的営み」と言い表すことができるのではないだろうか。また逆に、「私がいまここに存在している」ということ自体に目覚めていくということは、現在の境遇に落在していくあり方であり、これを「他力的営み」と表現することができるのではないだろうか。

明治の時代、親鸞の絶対他力の教えに生きた清沢満之は、このような自己を、「自己とは他なし、絶対無限の妙用に乗託して、任運に、法爾に、此現前の境遇に落在せるもの即ち

これなり⁽⁶⁾」と明言した。本願他力の教えに目覚めた「自己」とは、自分のはからいを超えた絶対無限のはたらき、すなわち阿弥陀の本願力に乗託して、現前の境遇に落在する存在のことなのである。

以上のように推究するならば、親鸞が開顕した浄土真宗の仏道とは、自力による超越を救済の契機とするのではなく、どこまでも我が身の徹底した自覚を通して開かれてくるのである。この現実の只中において、自力によって苦悩の心身を解脱して証果を獲得するあり方こそ、自力聖道の教えなのである。そして「横超」の仏道、すなわち浄土真宗の教えは、苦悩の現実を一步も離れることがないわけであるから、我々はこの現実の只中において、無明存在としての自己を嫌忌して超越していく必要性など、どこにもないのである。煩惱具足の凡夫であるという我が身の事実を一步も離れることなく、しかもそこに開かれる救済の道こそが、親鸞が明らかにした「横超」の仏道なのである。

いまの自分自身に積極的な意味を見出しにくい現代において、人間の本当の救い、真の目覚めを推究していく上で大切な視座が、親鸞の「横超」思想に示されているように思う。

1 詳しくは、拙稿「他力門哲学」における覚醒の構造」（『親鸞教学』第九〇号、二〇〇八年）、「親鸞思想における救済の様

- 相―「内在」と「超越」―」（『印度学仏教学研究』第五七卷第一号、二〇〇八年）、「横超の仏道―親鸞思想における覚醒の内実―」（『真宗文化』第一八号、二〇〇九年）、「群萌における覚醒の内実―『教行信証』『化身土巻』の記述を通して―」（『同朋佛教』第四六号、二〇一一年）などを参照されたい。
- 2 前掲「親鸞思想における救済の様相―「内在」と「超越」―」「横超の仏道―親鸞思想における覚醒の内実―」参照。
- 3 『新字源』（角川書店）九九三、二〇二頁参照。
- 4 『唯信鈔文意』（『定親全』三、一六八頁）。
- 5 『親鸞と学的精神』二〇頁（岩波書店、二〇〇九年）。
- 6 「絶対他力の大道」『清沢満之全集』第六卷、一一〇頁（岩波書店、二〇〇三年）。

【凡例】

- 一、引用文中の漢字は現行の通行体に改め、適宜、句読点等を補って書き下した。また旧仮名遣いも新仮名遣いに改めた。
- 二、出典の略記は次の通りである。

『定親全』―『定本親鸞聖人全集』（法蔵館）

【参考文献】

- 今村仁司『親鸞と学的精神』（岩波書店、二〇〇九年）
- 古東哲明『瞬間を生きる哲学』（今ここ）に佇む技法』（筑摩書房、二〇一一年）
- 田代俊孝『増補新版 親鸞の生と死 デス・エデュケーションの立場から』（法蔵館、二〇〇四年）
- 田代俊孝「『転』と「即」―親鸞の他力救済の内実―」（『同朋佛教』第四三号（同朋大学仏教学会、二〇〇七年）

親鸞の「横超」思想とその現代的意義（伊 東）

藤嶽明信「横超他力」『親鸞教学』第六八号（大谷大学真宗学会、一九九六年）

本多弘之「親鸞思想の解明」『現代と親鸞』第四号（親鸞仏教セクター、二〇〇三年）

本多弘之『シリーズ親鸞』第二〇巻（筑摩書房、二〇一〇年）

〈キーワード〉 親鸞、覚醒、横超、堅超、転成、超越

（同朋大学非常勤講師・博士（文学））